



# 教皇様の聲

# 9

# 257号

Libreria Editrice Vaticana, Citta del Vaticanoの転載許可済 2001

## 侍者の仕事

〔8月1日、ヨーロッパ12カ国から2万2千人以上の若者が侍者として集まり、

ヨハネ・パウロ2世の千回目の一般謁見に参加した。〕

**1** 今日の聖パウロ広場にはたくさんの若者たちが集まっています。1年前の大聖年の真只中、若い人たちが世界中から集まって世界青年の日を祝いましたが、皆温く迎えられました。神のみ摂理が使徒ペトロの後継者として私をお呼びになってから千回目の一般謁見が今日この広場で催されており、広場はヨーロッパ全土から使徒ペトロの墓へ巡礼にやって来た何千人もの少年少女のために開かれています。

侍者の皆さん、皆さんは方は昨日、バシリカ内の殉教者の祭壇へ向けて長い行列を作って聖ペトロ広場を通りました。世界中の若い人たちが聖年に始めた旅を皆さんはこうして続けています。永遠の都での巡礼のテーマ「新しい世界へ向かう」は、皆さんがキリスト者としての召し出しを真剣に考えようとしていることを示しています。

### 洗礼は真の典礼的奉仕を行う出発点

**2** 若者の皆さんを心からお迎えし、ここで皆さんにお会いできたことを喜んでいきます。(…)

最も大きなグループでやって来られたドイツ語圏の皆さんには特別の喜びをもってお話しします。ドイツからこんなにも多くの若いキリスト者の皆さんがやって来られたとは素晴らしいことです。

皆さんが祭壇に加わることは単なる義務ではなく大変な名誉であり、本当に聖なる仕事なのです。皆さんに考えていただけるようこの仕事についていくつかのポイントを挙げてみましょう。

侍者が身に付ける衣服は非常に特別なものであり、キリストにおいて共同体に迎えられる時だれもが身に付ける洗礼の衣を思い起こさせます。聖パウロがその深い意味を説明しています。「洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです。」(ガラテヤ3,27)

侍者の皆さん、洗礼の衣はもう小さくて入らないとしても、皆さんは侍者の衣を身に付けています。洗礼は、皆さん侍者が、司教、司祭、助祭のそばで「真に典礼的奉仕を行う」ための出発点なのです。(「典礼憲章」29参照)

### 侍者は最高永遠の司祭キリストのしもべ

**3** 侍者は典礼の祝いの中で特権的な位置を占めています。ミサに仕える人々は共同体に自分自身を差し出し、各典礼に存在し働かれるイエス・キリストを間近で体験するのです。共同体が集まって祈り神を称賛する時にはいつでもキリストがおられます。イエスは聖書に現存します。とりわけパンとぶどう酒の外観のもとに聖体におられます。イエスは司祭を通して働かれ、司祭はキリストのペルソナのもとに聖なるミサを祝い、秘跡を執行します。

ですから皆さんは、典礼から見ても、単なる「小教区司祭の助手」ではありません。何よりも、皆さんは最高永遠の司祭イエス・キリストのしもべなのです。そのため、皆さん方侍者は特別にキリストの若い友と呼ばれるのです。この友情を深め育てるよう努力してください。そうすればイエスが人生の真の友であることがわかるでしょう。

**4** 侍者はろうそくを持つことがよくあります。イエスが山上の説教で言われたことを思い出さずにはいられません。「あなたがたは世の光である。」(マタイ5,14)皆さんの侍者の仕事は教会の中だけに限られたものではありません。学校、家庭、その他の社会環境の中で、皆さんの仕事は日々輝かなければならないのです。というのも、教会でキリストに仕えたいと思う者は、どこにいてもキリストを証しすべきだからです。

若い皆さん、皆さんの仲間は本物の「世の光」(ヨハネ1,9参照)を待っています。皆さんのろうそくを立てて教会の中だけにしまっておかないでください。福音の光を、暗闇に住む人々、人生の難しい時をすごしている人々の所に届けるのです。

### イエスは無償でご自分に仕える若者を緊急に必要としておられる

**5** イエスとの友情についてお話ししました。この友情から何かもっと素晴らしいことが芽生えたらどん

なにうれしいことでしょうか。皆さんの中から司祭職の召し出しを発見する人が出てきたら本当に喜ばしいことです。イエス・キリストは、寛大に無償で自分自身を役立たせようとする若者を緊急に必要としておられます。さらに、女子の皆さんの中から

も、教会と兄弟姉妹に仕えるため奉獻生活を受け入れるよう主から求められる人がいるかもしれません。また侍者の仕事は、結婚という一致を望む人々に対しても、相互的で見返りを求めない奉仕がいつも喜んで行われるべきことを教えているのです。

(2001.8.1)

## 主が神殿に入られる

〔教皇様は、第1火曜日に「朝の祈り(賛歌)」として使われる詩編23(24)についてコメントされ、創造、啓示、また私たちの所へ来られる神についてお話しになった。〕

1 今聞いたばかりの神の民の古代の賛歌がエルサレムの神殿で鳴り響きました。この祈りの主な目的を理解するためには、3つの基本となる事柄を心に留めておく必要があります。まず1つ目は創造の真理についてです。この世を創造された神は、被造界の主でもあります。2つ目は神が被造物に与える審判です。私たちは神の前に立ち、自分の行いを問われることになっています。3つ目は神の到来という神秘です。神は宇宙と歴史に入って来られ、人間との親しい一致を自由に望まれました。現代の注釈に次のようなものがあります。「この3つの要素は神や神との関わりについての体験を表わすものです。私たちは神の働きによって生き神のみ前で生き神と共に生きることができるのです。」(G.Ebeling「詩編について」)

### 神は今でも創造主であり、宇宙を刷新される

2 詩編23(24)の3つの部分はこのような3つの基本となる前提と一致しています。これから吟味する3つの前提を連続する場面、また祈りのための詩的な3部作として考えることにします。1つ目は地とそこに住むものすべてが属する創造主についての短い賛歌(1-2)、宇宙と歴史の主に対する信仰告白です。創造についての古代の見方では、建築工事の要領で地球を描き神が地球の基礎を海の上に置くとしています。混沌とした破壊的な水域の象徴である海は、次に、無と悪に左右される被造物の限界を示します。創造された世界は水の奈落の上につるされますが、被造物を生み出す神の手が命を導き出します。

### 神がシオンの神殿に住みに来られる

3 次に詩編作者の目は大宇宙の広がりからシオンの小宇宙「主の山」へとしばられ、詩編23(24)の2つ目の場面に入ります。(3-6)エルサレムの神殿の前まで来ており、そこで神を信じる者が列をなして聖なる扉の門番に尋ね入場の質問をします。「どのような人が、主の山に登り、聖所に立つことができるのか。」(3)専門家が「入場の祈り」(詩編14、イザヤ33,14-16、ミカ6,6-8参照)と呼ぶ聖書の他の箇所にもよくあるように、司祭たちは、崇拝して主との一

致に入るための条件を示して応えます。示される条件は、単なる儀式上の外的な決まりではなく、生かされるための倫理的で実際的な必要条件です。典礼を祝う前の良心の糾明であり償いの行為でもありません。

### 神殿の神と一致するための3つの倫理基準

4 司祭たちは3つの必要条件を定めます。とりわけ「清い手と純粋な心」を要求します。「手」は「行い」、「心」は「意図」を示します。つまり「手」と「心」は、本来神とその掟に向かうべき人間全体を指しているのです。2つ目の条件は「うそを言わない」ということを求めています。聖書的には誠実さを含意しますが、さらには偶像崇拝に対する戦いも含まれます。偶像はにせの神、つまり「偽り」だからです。教えは、掟の第一戒が宗教と崇拝の純正であることをはっきり示しています。最後の3つ目の条件は、隣人との関係に関するものです。「隣人をあざむくために誓ってはならない。」古代イスラエルのような口述の文化では、言葉は正義と高潔に基く社会的関係の象徴であり、偽るために使われるものではありません。

5 3部作の3つ目の場面にたどり着きました。この場面は、神を信じる者が主と出会うために神殿に入る喜びを間接的に描いています。(7-10)思考を刺激する懇願、質問と答えが取りかわされ、神は順番に荘厳な3つの称号でご自分を示していかれます。「栄光の王、強く雄々しい主、万軍の主」シオンの神殿の門は擬人化され、門の上の横木を上げて所有者である主を迎え入れるよう求められます。

3番目の詩的な描写の中で詩編は勝利の場面を描きますが、ペトロの第1の手紙にある太祖たちの古聖所に降るキリスト(1ペトロ3,19参照)と復活した主の昇天(使徒言行録1,9-10参照)のために、東西教会はその詩編の部分を典礼に採用してきました。今日でもビザンチンの典礼では、復活徹夜祭の聖土曜日の夜に聖歌隊が詩編のこの箇所を交唱します。またローマの典礼では、ご受難の第2日曜日、枝の行列の終わりで使われます。大聖年の始まりに聖年の扉を開く

荘厳の典礼によって、私たちは深く感動しながらこの場面を体験しました。私たちが感じた感動は、詩編作者がシオンの古代の神殿に入る時に感じたものと同じです。

### 人間に会いに来られる「万軍の主」という称号が 象徴的に意味すること

6 「万軍の主」という最後の称号は、イスラエルの階級を示す可能性もあり、一見軍隊の称号のようにも思えますが、実際は宇宙的な意味を持つものです。主は、シオンの聖域という限られた空間の中で

人間に会うために来られるわけですが、軍隊として天の全ての星を所有する創造主であり、宇宙の被造物はこの創造主に従います。預言者バルクの書に次のように書かれています。「星はおのおのの持ち場で喜びにあふれて輝き、その方が命ずると、『ここにいます』と答え、喜々として、自分の造り主のために光を放つ。」(バルク3,34-35) 無限で全能永遠の神は、ご自分を被造物である人間に合わせ、出会って耳を傾け人間をご自分と一致させるために近づかれます。典礼は、信仰と対話、愛における神の到来を表すものなのです。

(2001.6.20)

## 主は荘厳にみことばを告げる

[水曜日の一般謁見で教皇様は詩編について8回目の要理講話をなさり、詩編28(29)についてお話しになった。]

1 専門家の中には、詩編28を詩編最古のテキストと考える人もいます。力強いイメージによって詩編28は詩的で祈りに満ちたものに統合されます。確かにここでは、連続する嵐のとどろきが描かれています。「声」と「雷鳴」を意味するヘブライ語の「コル」という言葉は、鍵となる節の初めに繰り返されます。その節では、詩編の緊張の高まりが作り出されます。このことから、またヘブライ語の「コル」という言葉が何度も繰り返されることから、詩編28は詩編注釈者によって「7つの雷鳴の詩編」と呼ばれています。実際詩編作者は、雷鳴を神の声の象徴と考えていたと言えるでしょう。超越的で到達不可能な神秘を伴い、創造された現実を混乱させ恐れさせるため突如分け入る声です。しかし最も深い所では、平和と一致の言葉を意味しています。ヨハネの福音12章を思い出すでしょう。そこでは、天国からイエスに答える声が雷鳴の形で群衆に伝わるものが描かれています。(ヨハネ12,28-29参照)

朝の祈り(賛歌)に詩編28を勧めることで、時課(教会)の祈りは神の威光への深く信頼に満ちた崇拝の態度をとるよう招いています。

### 怒りの雷鳴の中に、悪を裁く神の超越性がある

2 前唱の部分は2つの時間と場所に導きます。中心部では(3-9)、「広大な」地中海から解放される嵐について述べられます。作者の目に海水は、創造の美と輝きを攻撃し、むしばみ、破壊し、取り壊す混沌を作り出すものとして映ります。そして、嵐と怒りを観察することによって、神の無限の力を発見することになるのです。祈る人は嵐が北へ進み本土を打ちたたき様子を見、レバノンと時にヘルモンと呼ばれるシルヨン山の背の高い杉の木は、閃光を発する雷の攻撃を受け、おびえる動物のように稲妻の下で飛び上がります。とどろきは近づき、聖地を横切っ

て南へ向かいカデシュの荒れ野を目指します。

3 強力な動きと緊張の描写の後には、対照的な、詩編28の初めと終わりに描かれるもう1つの場面を黙想するよう招かれます。(1-2、9-11参照) シオンの神殿で神の栄光を崇拝することによって、苦悩と恐れに逆襲するのです。エルサレムの聖地と天国の聖地をつなぐ伝達の経路があると言っているでしょう。この2つの聖地では、神の栄光に捧げられる平和と賛美があります。鼓膜が破れそうな雷鳴の音は、典礼の歌声の調和に取って代わられ、恐れは神の保護への信頼に代わります。ここで神は「とこしえの王」、つまり全被造物の最高支配者である主として「洪水の上に御座」をおいて現れるのです。(10)

祈りによって、

神の真の望みは平和を与えることだと知る

4 2つの対照的な場面の前に、祈る人は2つの体験をします。1つ目は神の神秘を発見することです。神の神秘は嵐という象徴で示されますが、人間には理解することも支配することもできません。預言者イザヤが歌うように、主は雷鳴や嵐のように歴史に飛び込み、悪人や抑圧者の間に恐怖を蒔かれます。神の裁きが来ると、高慢な敵は嵐に打ちたたかれた木のように根こそぎにされ、また神の稲妻が粉々にした杉の木のようになります。(イザヤ14,7-8)

現代の思想家ルドルフ・オットーは、この光の中で証明されるのは神の恐ろしさであると言ひ、その恐ろしさとは、言語を絶する超越性と存在、人間の歴史における完全な正義だと示しています。あざむかれて神の支配的な力に対抗することは、神の完全な正義によってむだ骨に終わることになります。賛歌の中で、マリアも神の行いのこの側面を称揚することができました。「主はその腕で力を振るひ、思

い上がる者を打ち散らし、権力あるものをその座から引き降ろす。(ルカ1,51-52)

5 しかしながら、詩編28は神のみ顔のもう1つの側面を見せてくれます。それは親密な祈りや典礼の祝いの中で見つかります。思想家ルドルフ・オットーは、それが神の「魅力」であるとし、神の恵みから広がる魅力、神を信じる者に注がれる愛の神秘、義人に恵みが与えられるという落ち着いた確信です。悪の混沌、歴史の嵐、神の正義の罰に直面したとしても、祈る人は平和を感じ保護のマントに包まれます。神はご自分を称えその道に従う者を包まれるのです。祈りによってわかることは、主の真の願いが平安を与えることだということです。

神殿で不安は和らげられ恐れは一掃されます。「神の子供たち」全員と天使や聖人たちと共に天の典礼の祝いに参加するのです。そして嵐、つまり人間の悪意の破壊という洪水のようなイメージの後には天国で神の恵みの虹が弧を描き「神と地上のすべての生き物、すべての肉なるものとの間に立てた永

遠の契約」を思い出させてくれます。(創世記9,16)

### 御父の荘厳な声は、 御子の洗礼で鳴り響き地上の海を祝福する

このメッセージは、詩編28を「キリスト教的に」再読すると特に際立ってきます。詩編28の7つの雷鳴が宇宙の中での神の声を示しているのなら、この声は最も威厳をもって現れるのは、イエスの洗礼の顕現において、御父が「最も愛する子」として最も深いところでの一致を表わす時です。(マルコ1,11) 聖バシリオは次のように書き記しています。「おそらくもっと神秘的に、主の声はイエスの洗礼で天から降った時、海の上で響き、これは私の愛する子と言いました。それから主は海に息を吹きかけ、洗礼によって聖化されました。栄光の神は天から雷鳴をとどろかせ、強い声でご自分を証しされます。福音の偉大な『声』を通して洗礼の後に変化が起こることも『雷鳴』によってわかるでしょう。」(「詩編についての説教」30,359) (2001.6.13)

## 光を投じる主の変容

[避暑地カステル・ガンドルホにて、お告げの祈りの後、教皇様は主の変容についての短いお話をされた。]

1 明日8月6日は主のご変容のお祝いをします。福音記者ルカ、マルコ、マタイは3人とも、イエスが使徒パウロとヤコボ、ヨハネを「高い山」に連れて行かれたことを記しています。その山はガリラヤのタボル山だと考えられています。イエスは3人の前でご変容なさいました。「顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなった。」(マタイ17,1-2) イエスの隣りには、尊い姿をしたモーセとエリヤが現れます。御父ご自身は「光輝く雲」の中から声だけをお聞かせになります。「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」(マタイ17,5)

主はご変容のことを誰にも話さないようにと言われますが(マタイ17,9)、ご復活の後ご変容は福音の重要な部分となります。今日黙想しているイエスはキリストであり神の御子、栄光の光で輝く方です。

2 2千年たった今も教会は当時と同じ熱意でキリストが世の光であることを繰り返します。この光は毎日、人生の道に新しい意味を刻み込んでいます。

神のしもべパウロ6世は1978年8月6日に亡くなりましたが、その全生涯は「キリストは世の光である」というこの宣言に強められていました。その日

のお告げの祈りで、パウロ6世は話すことはできませんでしたが次のように書き記されました。「主のご変容は私たちの日々の生活に光を投げかけるものです。そしてご変容が示した不死の運命へと私たちの心を向けさせます。」

23年たった今、深く心を動かされながら再びその言葉を聞いています。感謝し愛情を込めて、尊敬すべき前任者パウロ6世のことを思い出しましょう。パウロ6世は複雑な難しい年月に忠実にキリストを証しました。天国の神の母、幸いなおとめを呼び求め、パウロ6世のために祈りましょう。

3 神の母マリア。ローマは今日サンタ・マリア・マジョーレ大聖堂の献堂式を祝ってマリアへの敬愛を示します。この大聖堂は、幸いなおとめマリアにちなんで名付けられた西方で最初の教会です。この祝日はローマ市民にとって非常に大切な日ですが、マリアに目を向けるよう招かれる日でもあります。御父は、御独り子の母、全人類の母としてマリアをお選びになりました。今も死を迎えるときもいつも御子イエスと一致してられるようマリアに助けをお願いしましょう。(2001.8.5)

「教皇様の聲」 ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙  
 ■毎月10日発行 ■定価：送料とも一部186円 ■年内定期購読：送料とも一部2,087円(税込)  
 詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。  
 財団法人 精道教育促進協会 〒659-0093 兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL. 0797-34-5920  
 FAX. 0797-34-4920 振替口座：01130-8-72393 財団法人 精道教育促進協会